

# Armando Palacio Valdés 考

富 永 浩

## 一 Valdés における『異常』について

Armando Palacio Valdés (1853-1938) 文学のすぐれた客観主義、知的精神については、どの本にもかいてある。客観主義をセルバンテス以来の伝統とするスペイン文学のなかでも、Valdés のそれに匹敵する人は、強いてさがせば Juan Valera ぐらいで、見渡したところ一寸みあたらないとすれば、世界文学における Valdés の主知主義の格づけができるというものである。近代スペイン文学の扉がヨーロッパの市場にむかつてはじめてひらかれた時は、文学史的に厳密にいうと一八八九年、E. P. Bazán がソルボンヌで当時の現代スペイン文学について語ったときとされ、これを皮きりに近代作家の外国語への翻訳がはじまるのだが、Valdés は Alarcón, Valera, Bazán などに、以来、第一級の重要輸出品目であり、そんなことから、その名は世界文学のなかでけっして珍らしい名ではない。ただ、日本では知られていないので、このあたりからも、わたしたちの国の外国文学がいかにゆがんだまやかし物であるかということがわかる。似ている作家に、アルフォンス・ドーデー、マーク・トウェンがあるわけだが、ゴンクール家のサロンにおける役割に象徴されるドーデーのフランス文学における地位をもつても、またヘミングウェイをして『あらゆる現代のアメリカ文学はハックルベリー・フィン』という一編の作品から出ている』と言わしめているマーク・トウェンの文学をもつても、たとえば Valdés の作品の“La hermana San Sulpicio”より芸術的な

完成度、作品の思想のこまやかさ、深さにおいてすぐれている作品はぜったい見出されない。claridad, serenidad, amenidad, ternura, finura, gracia, selección, armonía, burguesía が、どの参考書でもいいいあわせたように、かれの項にでてくる言葉である。あかるい海、あおい空にたぐうべき、すみきった目、いかにもラテン的な聡明さは、この作家の主知主義への信頼をいやがうえにもかきたてる。この作家をユーモア作家にみたてるほどナンセンスな見方はない。ヒロイズムや悲愴がかった浪漫主義をこのひとが斬りするときのきれ味のすごみは、ユーモアの概念とおよそ縁どおいものである。また、この作家を人間の善の信者などといって、人道主義的道学者にしたてる見法ほど通俗主義的なものもない。それは悲劇と背徳をも懷疑するところにできた彼の肯定的姿勢を、家庭的健全主義と混同するところの誤解からおこっている。人生を信じている者には、これほどにこやかな笑いはない。聡明であることと愛することとはなかなか両立しがたいものだが、かれの聡明さは、聡明であることが愛することを拒否しない、めずらしい例だった。こういう例はゲーテ、トルストイにも見出されるのだが、人生を愛することによってなお聡明でありうる聡明なんてものは、そうざらにあるものではない。

以上のごとく、Valdés の主知主義の評価について、わたしは人後におちるつもりはない。ところが、こうした平和で、おだやかで、もっとも理性的な、いわば真正面むきの Valdés と正反対のもの、いわば彼らしくない非理性的なもの、『異常』とでも呼ぶもの、本能的な暗黒が、Valdés にはある。もちろん、これはさきの主知主義をみとめた上のことであり、そのことは幾度でもくりかえし強調せねばならぬとして、しかし、また、この矛盾のゆえにこそこの問題はきわめて注目すべきテーマともなるわけであり、わたしはそれからこれを指摘したい。

第一は Valdés の作品における異常児的、精神障害的人物についてである。“José”(一八八五年作)には頭のよわい、Rufó という少年がでてくる。母親の仕事である鐘つきをする以外は仕事もせず、ただぶらぶらと村をほつつき

あるくこの少年は、小説のヒロインである村一番の美人 Elisa に想いをよせるが、村人もやじうま根性で、お前のいい人などとひやかすところから、本人もすっかりそのつもりになってしまっている。ところで Elisa の母親がしぶとい性悪女で、Elisa の恋人である José と Elisa との結婚をぶちこわしたいばかりに、Rufo の恋慕を利用し、恋がたきの José への敵意をかきたてて、José のなけなしの漁船の綱を嵐の夜きらせる、ということになる。筋のうえでは、ただ変ったタイプという端したの役よりはるかに重要な、いわば作品の不幸の原因、すくなくともその発条であり、いつてみれば少年は作品のなかの『悪魔』である。悪について目的をもたず、ただそれが悪であるがゆえに悪をほつするというところが『悪魔』の所以であり、そこがおそろしいところであって、そこにゆくと、Elisa の母親の悪のほうは損得という目的をもっているから始末がいい。少年は逆上すると、何もかも分らなくなって、どんなことでもやってのけ、激昂状態では地面にたおれて身をくねらせる。神経科的には、おそらく癲癇性のものに分類されるところもわれる。ついでに言う、ちかくは癲癇症状があったことが定説になっているヒットラーの例もあることだし、また悪鬼をおいだして癲癇をいやす福音書の話もあることだし、古来、癲癇は『悪魔』が人間界でこのんでくう定宿であるらしい。

“La aldea perdida”（一九〇三年作）の Pluton がこの系統にぞくする。これは良心の欠如そのものであり、つまり破壊の意志そのものであり、Rufo のような器官的故障とちがって、そんな原因など受けつけない、初めからそうであり終りまでそうである一つの精神である。これこそまさに作品における『悪魔』である。破壊力をふるう不条理という点では、戦争、独裁政治、よっぱらい運転などというものとかわりない。Pluton は太古以来の自然そのままの、明媚な田園村落に相棒の Joyana といっしょに流れこんできた鉱夫で、この腐りきった無頼漢はげれない人々がつくる平和境を傍若無人にあらしまわる。たくましい体軀の、この醜男があらわれるたびに、わたしたちは今度は

何をしでかすかという不安におののく。事実、その不安は物語りの進行とともにいよいよ事実と化して、ついに最後は村の若者たちの二組の結婚の祝宴が、Plutón の一味によってなぐりこみ同様の目にあい、そのうちの二組の花嫁は Joyana のピストルにたおれ、もう一組の花嫁で物語りのヒロインの Demetria は、前から邪恋をよせていた Plutón によって喉をきられて死ぬ、という結末になる。この人物が、すすで真黒になった顔に、ランプをぶらさげるといいうでたちで、森や坑道からひよっこあらわれると、わたしちに戦慄をあたえながらも、どこか滑稽味さえあって、童話的な雰囲気をただよわせる。わたしはその童話的な理由をかんがえるのだが、それは森や山や川という牧歌的な背景もさることながら、それが一つの象徴にまでたかまつており、この場合それは暴力の象徴であるが、且つそれが人間の姿をとっていることにあるようにおもふ。そしてその滑稽味であるが、それは Plutón が内にはおそろしい破壊の力をやどしながら、外形は人間なみの五尺余のちっぽけな寸法にすぎないという、このアンバランスが滑稽味の原因になるのではないか？ つまり、雄大な自然、厳肅壮重な人間情熱といった、人物の矮小さをきわだたせるものはそろっており、その破壊力をふるう相手、時期の決定も五尺余の体のなかで、人間的に、でたらめ加減におこなわれる。こうした対照的にきわだたれた矮小さに滑稽味があるのではないか？ 北欧神話のなかのロキという神、この神は英雄的な神々とはちがひ、いたずらもので、それでいて天地の終末をもたらしした宇宙破壊の元兇であるが、このロキにちよつと似ているところがあることは注意してよいことだ。

この小説はアストリアの鉱山地帯のものがたりであるが、“Santa Rogelia”（一九二六年作）もそっくりおなじ場所が舞台としてつかわれる。物語られる事件は数十年のひらきがあり、その間それだけの進化があつて、まだ緒についたばかりだった鉱山業はおおきく成長して、黒煙を巨大なえんとつからはきだす堂々たる製鉄工場などもできていく。そしてここに出てくる Máximo は Plutón を牧歌的なものから、企業、労働者すべてが高度に組織化した近代

社会へとつれだしたものとかがえればよい。この飲んだくれの、なうての悪党については、みんな憎んではいるものの、腕力があるところから手がだせず、はれ物にさわるようにしている。おなじく工場ではたらく Rogelia を妻にする前後のしばらくの間は、みように神妙にしているが、間もなく本性にもどる。こうした Máximo を Rogelia のいわずけだった青年が、その度のすぎた侮辱にたえきれず刺す。床にいたあいだ、かれを治療にかよってくる金持出の瀟洒な青年医師 Fernando Vilches があり、織細で純良なこの人と Rogelia はひそかに心をかよわせるようになる。それが全快した Máximo の耳にはいった日、かれは Fernando をピストルで射って瀕死の重傷をおわせ、さらにゆきあわせた警部を射殺し、逐電する。Rogelia はつききりで Fernando を介抱し、やがて Fernando が回復して町を去るという日、二人はむすばれる。一方姿をくらました Máximo はつかまり、無期懲役を宣され、アフリカの Ceuta で刑にふくしている。Fernando と Rogelia の生活は、物心ともにめぐまれた、幸福そのものの生活だったが、カトリックの掟によって二人の関係は内縁関係をでるわけにいかない。そのうち、夫婦の契りの神聖なカトリックの意味にめざめた Rogelia は、愛のない Máximo にかしづくことで自分を罰し、神の道にそむいた罪惡へのつぐないをしようとして、最愛の Fernando と子供を家にのこし、行方をつけずに脱けだして、Ceuta までかけてゆく。そこで働きながら、Máximo のいる刑務所にかよって、妻としての義務をはたすことをはじめる。しかし、神のない Máximo はニヒルな冷笑と罵言でむくいることしか知らず、Rogelia に暴力をふるって殺しそうにさえる。そして最後は、神のない男の当然の帰結であるが、首をくくって自らはてる。これでつぐないを果した Rogelia は、暗れてキリスト教徒としての妻となり母となる資格をもって、マドリッドの家にもどってゆく。さうとういった筋であるが、Máximo の惡魔的姿勢は終始一貫している。わたしたちは善と無縁な、人間否定のこの兇暴に注目したい。

この兇暴が具象化した人間像に“Los majos de Cádiz”（一八九二年作）の主人公 Velázquez がある。これは象

徴といったものではなくて、肉体をもった実在の人間で、したがって兇暴は、心理学的、精神病理的な分析の範疇にぞくする。この酒場の亭主は、喧嘩にかけては町一番の、美男の伊達男である。そして気前がおそろしい。難点としては背がひくいということになっている。じぶんの女にたいしてはひどい暴君で、専制のかぎりをもってのぞむ。それだけ女にもてるという自信があり、また事実もてます。取りまきがいつもいなければ承知できない性格ですべてに対して適応や協調ということができない。感情が激すると、ヒステリックな発作がある。以上を総合すると、これこそ典型的な神経症的気質で、いま、読者の目からその原因であるコンプレックスをさがせば、背がひくいこと、社会の上流ないし中流といった権力階層からの疎外意識等がかんがえられる。このほか性的異常からくるもの、幼少期のなにかふかい体験、などもこういう場合あるのかもしれないが、それは作品の範囲をこえることになって、わたしたちには探りうべくもない。ここにおけるなにか反社会的なもの、残虐的なもの、攻撃的なもの、衝動的なもの、破壊的なもの、感情のややもやと鬱積したものを見過すわけにはいかない。そこにはこれらを通じてなにか強烈なもの、それも暴力的な傾向のもとにおける強烈なものが認められる。それともここには『人間』への復讐、自己への破壊本能があると解釈すべきか？

このほかにもこうした暴力的な暗黒世界は Valdes の作品には沢山ある。たとえば、“La hermana San Sulpicio”（一八八九年作）の Daniel は恋のライバルの主人公にたいして、短刀をしごくあつさり突きさしているし、おなじく訪ねた先の隣家の美少女にことばをかけたばかりに、あわや短刀に手をつけそうにする娘の恋人がいたりする。“La novela de un novelista”（一九二二年作）には主人公の少年と友人をめちやくちやになぐりつける下町地区の不良少年グループがでる。“El señorito Octavio”（一八八一年作）では、Pedro も Octavio も子爵も、ある場合、殺意の衝動に身をまかせている。子爵は残忍で、いけどりにした狐をやきこころしたりする。

作品はつまるところ作者の頭脳と精神の所産で、そのなかの石一つ、木葉一枚といえどもそれ以外から胎生しているわけではないのだが、そうなるに、Valdés のなかの一体どこからこの兇暴は生まれたことになるのか？　こんなものをこしらえる Valdés の精神の生理とは一体どんなものか？　もちろんこれらの破壊をただちに Valdés の脳皮質に原型をおき、そこからそっくりえぐり出したものとする観察はあまりに単純すぎるわけで、そのあいだの距離と、そこにおける屈折と増幅の過程にこそ近代心理学の腕のみせどころがまたあるわけである。そしてこの場合も、かれらによるしかるべき専門的な説明があるはずであり、それが期待もされる。が、ともかくも無からうまれるものはないから、何かがあったはずであり、しかも、Valdés の場合、それがひじょうに強烈な何物かであることが事実とすれば、この何物かは、Valdés の精神機能のもっとも奥ふかいところ、脳髓のひだのいちばん入りくんだ暗がりにひそんでいる、彼にとって本質的な何物かであることはまちがいない。

以上が Valdés における第一の『異常』であるが、本質的には同一物としても、もう一廻りきめをこまかにした観察法がそれには必要な、第二の『異常』がある。“La novela de un novelista” は作者の自伝的な要素がかなりある作品だが、たとえば冒頭の、少年の主人公が村人たちのはやしたてるなかを牛の乳をしぼりに突進するところなどが、この第二の『異常』にがいとうする。ひとくちに言うところ、破廉恥な勇敢さといったものをわたしはそこに見る。きわめて主観的な精神である。もちろん Valdés 一流の対象をつきはなす客観主義があるからこそ、鈍重さ、不器用さといった戯画像のひとつとして、それもとらえられているわけで、このあたりはなかなかむずかしい問題であるが、しかし、この場合、そんな客観主義ではどうにもならぬ、ある精神姿勢がみとめられる。変にむきになる態度といってもよい。おもい定めたら、誰がなんといっても止まない、否、じぶんでよそうとしても何かがよすことを許さなくなってしまう、そして、他からとめられると、却って油をそそぐ、といった傾向である。つまり、ひじょうにデリケ

イトな領域になってくるが、ここには愛や尊敬とは正反対の、おそろしく利己的なもの、挑戦的なものがある。それは憑れたような、非理性的なものであり、少年であるだけに、わたしたちはこのデモーニッシュなもの、熱病的なものに、どぎつい、圧倒されるものをかんじるのである。そして、これは今迄あげた人物のどれにもあるものである。

Valdés の主人公たちには、一連のどくどくな、にやけた表情があることは、Valdés ファンならみな気がついているだろう。にやけたということは、単純な、健全な世界では、たいした意味ではない。ただ癖のある一つの笑いかにすぎないわけだが、病的な世界の露出としてのにやけた表情もあり、Valdés のがこれである。デモーニッシュな攻撃的意志が、戯画化による卑小像という客観主義によってひねりがかけられると、こうしたにやけた表情ができるともかんがえられる。このにやけは、“La novela de un novelista”のおさない主人公の、はやしたてをはねのける表情にもあるし、“La hermana San Sulpicio”の Cefirino Sanjurjo にもあり、このお人よしの平凡な人物の、いったん狙ったらとことんまで追求してやまぬ、不退転の決意、いうなればねばりをじっと見ていると、いともこやかな、社交的な微笑のうらがわにはりついているこの無気味なにやけに気付く。

第三の『異常』としてあげたいものは、性的なものである。いったいに Valdés は女性の美、すなわち精神的な美などとはまったく無関係な、審美的ないみでの美、みめかたちの完全、つまり美人によわい作家で、こうした女性美への愛の強度、審美的な角度からするエロチシズムへの接近の強度は作家によってそれぞれがう。同時代の作家を例にとると、Galdos, Pereda, Bazán など、Valdés からみると、ほとんどないぐらいに少い。そして Valera はおおい。Valera も Valdés も懷疑主義者がエピキュリアンでありうる、面白い例であるが、かれらのエピキュリアニズムのしんをつくっていたのがこの女性美讃仰だったと言えないこともないし、言いかたをかえれば、こうした体質的な部分にたいしては、思想といった観念的なものはどうにも齒がたたないのかもしれない。こうした文学における



女性美讃仰ということは、トロヤ戦争のヘレネが美しかったとか、椿姫がうつくしかったというのは一寸いみがちがうので、それらはより美しい方が内容がよりもりあがるという物語上の効果からおこるにすぎないのだが、この方は作者の精神組織といった、もつと肉をきりひらいた、作者の生命と直結するもので、作者の時代がふるとか新しいとかは、もうそこでは問題ではない。作家の生身の人間があるだけである。そして、こうした視覚的な線からくるニロチシズムをわたしはより上品だともいわないかわり、もつと肉体的なエロチシズムよりもエロチシズムの量がすくないともいわない。むしろ、これにこだわる作家は、エロチシズムへのこだわりである以上、エロチックな人間といつてよく、そして、そのこだわりが異常にまで執拗で熱っぽいならば、そのエロチシズムは異常性欲といつてよい。

谷崎潤一郎のエロチシズムの一部にはこれがあるし、現代スペイン文学では Zunzunegui がこれで、わたしが Zunzunegui を信ずるわずかな理由はこれである。Valdés の場合 “La juventud del doctor. Angélico” (一九一七年作) の主人公にたいする、後見役の將軍のわかい妻君 Guadalupe, “Santa Rogeila” の女主人公のかちほこる女神のごとき美。あるいは “La hermana San Sulpicio” のなかの子爵令嬢 Isabel。そのほか、主人公がハッと息をのむような、そしてあさましいまでに狼狽し、おそろしく緊張する、それ以外にこれほど緊張するのは神の啓示をみるときぐらいだとおもわれる、そんなような女性美が、Valdés の作品にはほうぼうに見出される。たとえば “Riverita” (一八八六年作) がよい例で、主人公の少年は、あたらしい継母にひきあわされたとき、その美しさに胆をうばわれ、それからというものの彼女の顔から目をはなすことができず、それを相手が不愉快がつても、あまりの美しさに敵意をもつことができない。ここには少年のセックス、少年のなかの大人、というテーマもはいっている。

このテーマは、このなかの、寄宿舎の洗濯女と少年との交渉によって、なまなましい現実性をもつ。これはかなり退屈なこの小説のなかでももちろん、Valdés 文学ぜんたいのなかでもまさにゆゆしい部分である。宗教経営の寄宿

舎に主人公はいっているが、その洗濯女に Petra という肉体美があり、例によってあくことなく目で讚美するうちに、少年は Petra の性的な寵愛をうけるにいたる。はやい官能のめざめと、そのはげしい燃焼、少年特有の動物的な熱烈さがそこにはある。そのうちに少年の執拗さにうんざりした Petra は、べつの色白の、小肥りの少年に寵をうつすことになり、ある日、Petra の部屋に主人公がはいってゆくと、Petra のスカートのなかからその少年がとび出す。ここにおけるセックスは早熟であるがゆえに病的であり、変態性欲のもんだいに入れてもよいのだが、事実、早い性への埋没は少年の一生をめちやくちやにし、いうならば廢人にしてしまうほど危険なものをもっているはずである。世の良俗は Clarín の僧族批判などよりも、自然主義では傍系になる Valdés のこの性追求のほうに、はるかに不健康な道徳の敵をみいだすべきだった。いいかえれば、この部分を『異常』の角度からながめ、Valdés 文学の特殊をみてやらなければ、Valdés には気の毒である。

幼いもののあまえ、可愛がられることを求め、そのように仕むける演出技能、こういった少年のなかにあるたたかの心理学者は、Valdés 文学に普遍的にながれる、そしてひじょうに面白いテーマである。そして、書いているところもあるし、ないところもあるが、ともかくそうした外側にあらわれている面よりもっと奥の世界のもんだいとして、Valdés の主人公たちはがいして独占欲がつよく、嫉妬ぶかい。感じやすく、きずつきやすい。性のはやい目覚め、少年の異常にはばをひろげた性欲、異常な嫉妬ぶかさ、わたしの知るかぎりではブルースト的世界の出発の領域はこういうところであるが、その意味で Valdés のこのあたりは充分ブルースト的であるといえる。規模としてはブルーストにたいして奮の程度をでなかったが、しかし、時間的にブルーストより二十年はやいということは、Valdés のリアリズムの非凡さ、新しさの何よりもの証拠だろう。

Valdés の主人公がよく泣くという事実がある。泣くということは衝動的な、抑制をとりさった感情世界であるが、

そういうことは異常にかんれんするわけで、わたしはこれを Valdes における第四の『異常』としてあげたい。まことに Valdes 文学の主人公たちはどれも泣きべそで、子供時代もよく泣くのだが、おもしろいことは、大人になってもよく泣く。もちろんここには人間のところが所詮、子供っぽいという辛辣な哲学がかくされてもいるわけである。今、この泣くという例をあげることは略するが、泣いた、泣きたい、泣きそうになる、という表現はかぞえればきりがない。Valdes の涙は、制度や因習のしいたげに泣く社会的なみだではなく、また、宗教的なみだでもない。もっと生理的な、もっと器官的な、また、それにとまなうところの情緒活動としての涙である。つまり、涙腺の機能に重点をおいた涙であり、ひじょうに張りつめた感情があり、それが加速度的に爆発点へとむかって刻々にたかまつてゆき、ついに頂点にたつて口をひらき、せきをきつたように流れでる、その一連の生理現象であつて、救いのない涙ではなくて、むしろ後味はわるくない種類のなみだである。しかし、嘔吐や排泄などと似ており、いきづまる極限的切迫感の瞬間をもつていて、その際、ひとつの深淵をのぞかせる。こういう生理としての涙が文学のテーマになるという確信を Valdes はもっていたらしい。もっとも、中にはただいわるセンチメンタルな涙にすぎないものもあるのは事実で、これは Valdes 文学の甘ったるい、俗っぽい点であるが、ほんものの『異常』もおおいのである。なお、自伝的な作品によると、Valdes の父親が泣きべそだったようで、Valdes にもそれが遺伝していた疑いはあるのだが、とすると、その遺伝をみつめていたということかもしれない。

以上、Valdes の四つの『異常』をあげたが、そういうことから考えられるのは、一般論として Valdes にはあらゆる理性的なもの、抑制的なものを取りさつて、感情だけが無拘束に羽をのばす特異な世界、いうなれば純粹感情とでもよぶ世界があったようである。機能的には大脳新皮質にたいする大脳辺縁系ないし間脳のうけもちにあたる世界である。たとえば Valdes には子供が無心にうたうような、天真らんまんたる世界がある。自然をまねにすると、む

しょうに感動して、歓喜のさけびごえをあげ、それにおどろこむ。あるいはなにか主人公に筋のうえで幸福がおとずれると、森羅万象がよろこびの歌をかなでるように、精神に明るさが沸騰する。つまり、情緒に没入し、情緒と一体になってしまふわけで、そのみなぎりの勢と感情のみずみずしさが印象的で、それは一種の『異常』をおもわせる。というのは、よろこびばかりでなく、悲しみ、怒り、憎悪、嫉妬、エロチックな情感なども同じように、手放しの状態で跳梁できるからである。つまり、理性の発達しない子供の心理の異常さであって、何のことはない、体だけ大人になった子供がそこにいるのである。Valdés にあるおそろしさは、子供の心理のおそろしさ、無邪気さのもっている邪気である。Valdés の『異常』とは、情動脳の異常な発達といってもよいかもしれない。

しかし、科学的な知見と、その病理解剖は専門の神経科医にまかせることにしたい。ただ、わたしの気づくことを参考までにかいておくと、裕福な家庭の長男として両親の愛をふんだんに享受してそだったはずの Valdés なのだが、そのあと弟が二人うまれてゐるのに、不思議にその弟のことを書いていない。これは愛情を独占しようとする幼児の姿勢が、故意に無視するというかたちをとり、それが無意識的に作品にうつされていると解釈できないことはなさそうだ。しかし、こうした心理分析はわたしには興味がないので、わたしがこの項の目的として言いたいことは、じつは以下の決論の部分にある。

Valdés の世界文学のなかでもきわめて高い位置にたつ、おだやかで理性的な精神、つまり正常な精神、人間の頭脳がもちうる最高度の聡明さ、そのラテン的な、スペイン的な文学的結晶。こうした Valdés 文学の客観主義にとって、これらの異常な主観主義、つまり『異常』はどういうことになるのか？ もちろん、この『異常』によって Valdés の正常がまやかしいものではない。それどころか、かれのなみはずれた感情、それを抑制する、もうひとつそれを上廻るこれまた並はずれた理性、ということが、Valdés の理性のたくましさ、おおきさがこれに

よって理解される。瘴猛な犯人をとりおさえる、もうひとつ腕ぶしのつよい警官といったところである。そこにはものすごい破壊のエネルギーがひそめられており、バランスが一寸でもくずれたら、いつきよに重心が逆転して、破壊一色でぬりつぶされるような可能性があった。そうした可能性のうえに、その可能性との日々の、刻々の対決のうえに、それとの拮抗関係のうえに、かれの精神の健康がたもたれていた。しかし、本来、健康とはこういうものではないか？つまり健康にも種類があり、無菌的な状態による健康もあり、保菌者、部分的な疾病者でありながらの、免疫的な状態による健康もある。現代的な、人間的、文学的な概念では後者に軍配があがることは常識とせねばならぬ。いいかえれば、それは結核菌を石灰沈着の層でとりかこんで、元気にうごいている人間の社会的健康と同類であって、結核菌の毒性がつよければつよいだけ、石灰沈着の層も厚くかたいことになる。わたしたちは、火薬庫のうえにのったような、おおきな危険のうえにあるところの、最大限の緊張のうえに成りたつところの、複雑微妙なそのからくりのゆえに、Valdésの精神の平和と駭蕩を信じる。前世紀のなかほどに生れ、内戦のさなかまで生きていたこのひどく長命の作家が、その生涯において、身のまわりや社会とのふれあいのなかでの、破壊と理性との間断ない決闘、かけひき、おり合い、のために費した辛苦がどんなものであったか、おそらくそれは曲芸の綱わたりそっくりのあぶなっかしさから成り立ち、能力の限界すれすれの、したがって無事しのいだことは神の加護としか言えないような危機をつねにはらむものだったのだろうが、そして、同時にそれを試練としてたくましくきたえられてもいたのだらうが、そのドラマの輪郭と委細がどんなものであったか、わたしはそれをおかんがえる。暴力を作品化すること内面の暴力を解消していたという、たしかに一応の理屈をもつ分析にわたしが満足できないのは、このドラマの實在にふれることがないからである。Valdésもそれを黙してかたらぬ以上、それは永遠の謎であるが、それがわたしたちの想像をこえている、ということだけはわかる。

## 二 九月革命の証人としての Valdés 文学

九月革命とは一八六八年九月、Cádiz における Prim, Topete のプロモンシアメントによって、イサベル二世が王座をおわれ、国外に蒙塵し、腐敗した側近政治に終止符がうたれる政治変革である。十九世紀スペイン政治史のなかで、おおきな政治事件によって記念される年といえは、おおまかに言って、古い王制の永遠の崩壊をもたらした一八〇八年、その精神にそった憲法制定の一八一二年、自由主義的性格をもったリエゴの革命の一八二〇年、カルロス戦争勃発の三三年、共和的ブルジョア勢力によるカタルーニア反乱の四二年、二月革命の影響による都市反乱の四八年、オドンネルのプロモンシアメントによる進歩的変革の五四年、労働者、農民の動揺の五五年、九月革命の六八年、それにもとづく憲法制定の六九年、カルリスタ蜂起の七二年、アマデオ退位、共和制布告の七三年、アルフォンソ十二世による王政復古の七四年、米西戦争の九八年あたりとなるが、九月革命はこれらのなかでも特異な地位におかれてよいものではないか？ これらの諸事件は、いわばスペインの内部矛盾が膿となって外にあふれたような、悲劇的緊張のたかまりだったが、六八年は緊張はあったが、かならずしも悲劇的とはいいいかねるものがあったという点で特徴的ではないか？

十九世紀スペイン政治史の特質は、政治が国民一般の参加をしめだした上部の構造でのもんだいで、いわば権力の争奪をめぐるこれらのでいだを往復する振子政治にすぎなかったことだとされている。そこには本質的な区別がすくない。ただめまぐるしい交替と翻覆のくりかえしがおこるだけで、じつさい、わたしたち外国人にとっては、それをよくこなすことは容易ではないくらいである。これをわたしたちは私流に、政治史が社会史とはべつな場所でおこなわれていた、という言いかたで表現してはどうかとおもっている。それともう一つの特徴とされていることは、それにも

かわらず、民衆生活を基盤とする社会の進化が、この間、上部のうごきとは別にじょじょと積みあげられていったことである。ところで六八年は社会史との歯車のかみ合いがあったという点で、たしかに他とちがっていた。だから暗さがない。暗さをもたぬということでは、このほかに国土防衛と市民革命とが交錯した一八〇八年ぐらいではなかったかとおもわれる。これは、それまで階層的に、地方的に分裂していた、そしてその後も分裂をつづけるであろう国民に、一つの共通分母ができた例外的な瞬間だったということである。イサベル追放というその共通分母は、民主主義的プログラムをいっばいかかえた、前向きな精神を原理とした。九月末、プリムがのろしをあげたという報が電氣のようにつたわると、津々浦々に感激のうずまきがわきおこり、『自由、平等、愛国』の熱狂的叫びが國中をうずめる、というこの革命の風景は、こういう事情にもとづいていたわけである。

この後、あくる六九年には、アンダルシア、エストレマドウラ、カタルーニアの都市における共和主義者の蜂起があり、これは新政府によって弾圧されることになり、同年、召集された議會で王制が採決され、七〇年、アマデオ即位、七三年にいたってアマデオ退位から急転して共和制布告をみるにいたる。しかし、共和制の生々期間はわずか一年十ヶ月で、七四年にはアルフォンソ十二世による王制復古となって、これから二大政党制のもとにおける保守的政党間の政權交替という、いわば社会的反革命の時代へとはいり、革命の時代はここに幕をとじる。六八年から七四年まで、この六年間は政治的ゆれのはげしい期間であったが、しかし、そこに一つの運動方向が、つまり共和制を最終目標とする革命路線があったことはたしかなことで、六八年はその開始点、砲口というふうに全体的な視点から性格づけられねばならぬ。王制が打倒されて、共和制がくる。これは何といっても人類社会最大の政治変革であり、これほど血をわかせるものもないのだが、こうした定石を六八年がふむものだったということも、この事件のあかるさ、国民的感動、その理想主義的性格の原因になっていただろう。かれらのビジョンがフランス大革命にあったことはこ

れからして当然である。事実、革命の報とともに街頭におどりで、町角で、あるいはバルコニーのうえから民衆相手に情熱をぶちまける演舌家たちの言行には、フランス大革命の主役気取りの表現があったことが記録にのこっている。

六八年のもう一つの特徴は、背景に哲学、思想のうらづけがあったことである。フランス大革命におけるヴォルテール、ディドロ、ルッソーにあたるものだが、そのへんにもフランス革命との類似点、すくなくとも類似しているという意識の必然性があった。かれらの名をあげるゝ Pi y Margall, Sanz del Rio, Nicolás Salmerón, Castelar, Francisco Giner de los Rios, Fernando de Castro, Ruiz de Quevedo y Tapia 等といったことになり、かくしてたんなる政治事件ではなく、もっと巾のひろい、ふかい場所に根をおいた運動だったという点は、たしかに六八年をかなりユニークなものにしている。その思想の性格であるが、それはブルジョア的自由主義、近代モラルとしての個人主義、観念の絶対にたいする実証本位の精神、したがって科学への信頼の精神、それらを内容とするといつてよいであろう。Galdós の “Los episodios nacionales” のこの部分 (España sin rey) には、六九年の議会における蜂の巣をつついたような、てんでにおもいおもいの方法で、意気けんこうと、これらの思想が表白される様子がかかれている。この議会は解放された自由主義思想、実証主義思想がことばをもった点で画期的な意義をもっていた。スペインについての通念には伝統的に、近代や科学と無縁な、いわば中世的スペイン、教会建築、闘牛、フラメンコで象徴される、浪漫的な姿をもったスペインがあることは否定できない。もともと今から二十数年前は、これと反対のスペインが、しかも国内を戦場とするまでに尖鋭強固なかたちで国家の半分をしめていたというのが事実だが、その後の社会の推移はまたこの伝統的通念にたちもどらせて現在におよんでいる。しかし、近代と科学と民主主義の歴史はまぎれもなくスペインにあり、こういったテーマのもとに精神的に内面から再構成をしてみると、あたらしい



姿をもったスペイン史がうかがいがってくるはずだが、六八年はスペインのこうした性格運動がいちばん歩巾をひろげている時点の一つである。この場合は偶然という方がむしろ正しいが、わたしたちの社会の明治維新（一八六八年）とまったくおなじ年であるということは大変おもしろい符合である。というのは封建主義のアンチテーゼとしての民主国家を社会の理念とするという点で、国家の線のうえで自由主義がはげしく志向される、という点で、二つは似ているからである。思想のうらづけはまだある。というのはスペインにおける労働運動の歴史ははなはだ古く、すでに一八六九年にはインターナショナルへの加入によるスペイン支部の設立があるのだが、それにはブルードン、パークニンにもとづく、それ相應の思想的用意があったわけで、これと六八年とのあいだに地つづきの相関々係がなかったわけではない。そして九月革命以後、共和制への進展過程のなかでも、アナーキズムが地方独立運動と組合主義の線から六八年テーゼにはたらきかけ、それへと屈折させてゆく一連のうごきがあり、それを証明する資料もある。これもまた紛れもないスペイン哲学思想の成果としなければならないもので、これも六八年を遠くからささえる思想的うらづけだった。スペイン的特殊にたいするヨーロッパ的勝利、という性格をこのときの時代精神にあたえることはできよう。これもスペインにおける夜明けのひとつだった。もっとも革命としてはややお祭りの、軍事行動がないこともなかったが、流血はすくなかった。もしこの時、もっと大きな戦争がおこっていたら、つまり、そういう形のとりかたのもとに革命が成立していたら、一九三六年の悲劇は回避されていただろう。Galdósの文学的に通俗化した、前掲の膨大な国民史にしても、それが一八七〇年代から八〇代にかけてスペイン国民の精神形成におよぼした影響は甚大なものがあつたようだが、それは国民と民主主義との同心円的なかさなりというパースペクティブが母胎になつており、その点でいかにこの時代らしい作品だった。

九月革命に集約され象徴される自由主義的、進歩的実証主義のなから、世界にかがやく十九世紀スペイン・リア

リズム文学の花形作家たち、Galdós, Clarín, Pereda, Bazán, Valdés 等が輩出する。このひとたちに、さらに年令的には一寸おくれはするが、Menéndez y Pelayo, Picón, Munilla などをくわえ、一つのグループとしてこれにしようど『九八年の世代』という名があるように、『六八年代の作家』という呼名をあたえることはできるのではないか？ (Valera は年令のために、Alarcón は非合理主義的傾向のために、これから除かれることになる。) このひとたちに共通の法則を見出すこと、そして時代史とのかんれんのもとに、それによってこの文学の性格を規定することは、この時代の文学を理解する手がかりとなるものではないか？

その一員である Valdés の文学は、九月革命の記録による証言という一面をもっている。たとえば、“Maximina” (一八八七年作) には革命のまえ、カフェーで過激分子が驚天動地の大事件がせまっている、氣勢をあげてみせるところがでてくる。主人公の友人 Mendoza は革命運動のために地下にもぐる。つづいて革命がおこり、マドリッドの町を楽隊がねりあるき、バルコニーはいろとりどりの飾り布をたらし、教会の鐘は御義理ながらもなりつづけ、祝いのアーチが大通りにたてられる、といった革命下の首都の情景がえがかれる。また、ついでだから書いておくと、Lasilla 子爵夫人の娘 Filonea という、モダンなインテリ女性がこの作品にはでてくる。民主主義史研究には、こうした解放された、あたらしい女性の몬드がいが一項目としていられるわけだが、この女性などはおそらくそのはしりにぞくするであろうという意味で、これも六八年の時代史的厚みの例証となるだろう。“La novela de un novelista” には Oviedo の町に革命がおとすれた日のことがのっており、町中の歓喜と昂奮のうちに、イサベル女王の像が群衆によってひきずり倒される様子がえがかれる。この時、Valdés は十五才で、その地の中学生であり、生徒たちの昂奮はたいへんで、とくに Clarín がその先頭だったとされているが、作者はそのときの体験をつづっているわけである。“Años de juventud del doctor Angélico” には、この時期のマドリッドのカフェーに、革命分子

の青年たちがたむろして、かたずを呑みながら急進的新聞 *El Combate* の売子があらわれるのを待ちかまえている光景、おそらくこの時期の革命精神のもっとも昂揚した瞬間と場所がのっている。また、主人公の親友 *Pérez de Vargas* は流行のデモ騒ぎのとはっちりをうけて負傷する。

*Valdés* はなぜこうくつかえし六八年をかたつたのか？　じぶんは群衆の暴力にいやな気がしたという言いかたをしているし、それに嘘があるとはおもえないが、しかし、本質的な共感がなかったら、こうした取りあげかたははしなかったとおもう。彼もまた六八年の地平線からうまれた一人だったのである。(Clarín の “*La Regenta*” とならぶこの『六八年代の文学』の代表作である Bazán の “*La Tribuna*” (一八八七年作) の主人公が、*Amparo* という女性に姿をかりた九月革命だったということは、まことに含蓄のふかい示唆といふべきである。)

この革命の理念には、それが実証的合理主義を志向する以上、無神論的反カトリシズムがあったことは当然としなければならぬ。じつは右にあげた、新聞をまっているという青年たちも、テーブルで生理学的解釈による宗教無用論をくりひろげているが、この反カトリシズムが幼稚なマテリアリズムをでなかったことを批判することは容易である。しかし、今日のカトリック教会の、現代の宗教としての盤石の思想的権威はじつは、こうしたマテリアリズムの単純野卑な攻撃への防衛としての自己超克の結果もたらされたものである点もたしかにある。だから、それだけの歴史的意義もあったわけだし、自由を確認する手つづきとして、宗教にたいする訣別と離反をどこかでくぐるといふことは、ヨーロッパ思想の歴史的法則であつて、スペインだとしてほかの社会といっしょに現代を共有する社会である以上、この法則からまぬがれるわけのものではない。そして事実、そうした否定現象はここ数十年にわたっているいろいろなかたちであらわれていたのだが、その主要関節としての六八年の地位はおおきい。*Menéndez y Pelayo* も *Galdós* 論で、*Galdós* とむすびつけながら、因習的、伝統的カトリック信仰がはじめてゆすぶられ、批判的にあつかわれた

のはこの革命からであるといっている。

ところで Valdes であるが、それが聡明な配慮によるカムフラージュのためか、思想がどうであれ、カトリックの信者であることをやめないスペイン的精神風土にかれもいたためなのか、そのところは問題があるのだけれど、(つまり、作家の意識のうえて信仰問題がどれほど整理されていたかという問題になると、Valdes もかなりあいまいな点がある。そしてこの傾向はスペイン作家の特性といつてよいほど、そこでは一般的である。それだけ自由思想が虚弱で、体位が小さいことになる。) ともかくもカトリシズムに正面きつた否定を宣言することは一度もなかった。信仰を肯定もしないかわり、否定もせず、ありのままを再現するという芸術理論から、人間の宗教心、カトリシズム信仰を現実としてかくという態度をとっている。このへんが Valdes がリアリズムとナチュラリズムのほそい境界地帯のうへの、リアリズムよりにいたという理由になっている。しかし、Valdes の揶揄と風刺というものは、しよせん信じている者のことばなどといったものではなかった。たとえば、“Marta y Maria”(一八八三年作)の例でもめいりょうなどおり、性の天才的な観察者だった Valdes は、性と宗教との隠微なつながりをすでにこんな早い時期に、いじわるいまでに看破っていたのだが、これも正面きつた否定よりどれだけ人のわるい否定であるかわからない。この点でも Valdes はまさしく『六八年の作家』だった。

『六八年代の文学』について、もう一つの特徴をさいごに書きくわえたい。たとえば Valdes の処女長編“El señorío Octavio”では、土地貴族の子爵、没落小地主の妻、進歩的インテリな家庭出の主人公、貧乏な小作人出の子爵の従僕というふうな、社会的ないろわけのうえて恋愛悲劇がくみたてられているのだが、総じてこの年代の文学には、作品設定の底の思想に『社会』がある。Valdes は小説家になるよりも、経済学を専攻したかったぐらいだといっており、中学時代これを耽読してあやうく卒業しそこなうほどだった。Galdós の代表作“Misericordia”

(一八九七年作)では、主役は人でなく金であるといってもいい。Benina のやりくり、小さなうらざり、忍耐をつうじての金の複雑なうごきが作品の中心主題であり、したがってこれを抜いたら、作品は空気をぬいた風船みたいにしぼんでしまう。つまり、Benina の慈悲の崇高さ、この崇高さはなんびとも否定できないし、文学における崇高さでこれをしのぐ例は世界文学にもないだろうとさえおもえるが、この崇高さは金をその顔にしている。もちろん、そこにはそれだけのスペイン資本主義の成熟があるわけだが、それを文学にまで昇華させる作者、そして時代の趣向は奇特とせねばならぬ。バルザックは言うもおろか、フローベルの『ボヴァリー夫人』でも、イブセンの『人形の家』でも、かんがえてみると、金銭関係が物理的な仕かけとして意外におおきな役割をになっていることに想いあたる。よその国はさておき、中世的、非形而下的性格をおうおう特徴とされるスペイン社会において、形而下的代表のこの『金』の画期的意義はいくら強調されてもされすぎることはないし、まったく目をみはるほどすばらしい。

『六八年代』は、“La Fontana de Oro”(一八七〇年作)から“La Regenta”(一八八六年作)の一六年間に、バルザックからゾラまでのながい道程をあゆみ、その国土のうえに近代リアリズムを完成した。スペイン精神史上、かれらほど健康で、たくましく、明るい精神はそうないはずである。なぜならば、疑う精神、これがなければ学問はなりたないが、これともう一つ、一般法則を具象のなかに見つけなければやまぬ、そして現実はその一般法則をもつてはたらきかける普遍的方法、これこそ科学とヒューマニズムの基本であるが、この二つを彼等はずもっていたからである。『六八年代』には、『九八年代』の挫折感、危機感がない。それだけに古いという言いかたをしても、もちろんかわらないが、スペインで健全な精神がもとめられるとき、かれらにまで遡らなければならないものが彼等にはある。もつとも反動からとおい地点にかれらの精神はあり、後の世のひとびとはアルカジアにあそぶ巨人のおもかげをスペイン文学史のなかを濶歩する彼等にみいだすことだろう。

## 三 Valdes 文学における galanteo

元来、日本あたりならきざっぽくて歯がうくような甘ったるく、ねっとりとからみつくような求愛表現上の趣味、いわゆる galanteo (男の女への言い寄り、つまり口説き) がスペインにあることは誰でも知っている。もっとも、これはちょうど日本における武士道や寺院建築のように、現代スペインにあつては伝説のなかにしか生きていない、外国人がエキゾシズム趣味から勝手にかぶせたイメージにすぎないという考えかたはありうるのだが、しかし、見法をかえると、武士道や古刹が現代のわたしたち日本人の精神形成にある影をおとしていることは客観的にいって案外しんじつであるかも、つまり、祖父の顔立ちをわたしたちがとどめている程度にそれは事実であるかもしれないのであり、そうならば、それとおなじ程度にそれは現代のスペインにとって実在的なものであるかもしれない。

世にきこえたドン・ファン、ドンファニズムは文学的な出所もはっきりしていて、まさしくスペインの名産物であり、galanteo はこれと手をくんで、スペインが恋の国であるといった、きわめて単純、おおざっぱな概念を世界に流布することにもなっている。つまり galanteo はドンファニズムと不可分なものとして、いわばそれに対するアクセサリーの関係をもって存在してきた。そのにやけた、わざとらしい物腰によって、言うにいわれないやるせない、なやましい、むれかえるような情緒的ムードをかもすのが galanteo であり、いいかえれば、ここではエロチシズムに表情ゆたかなしらべがながれ、そのしらべの意匠は粹で、あだっぽく、文明の典雅と野性のふしぎな結合をみせている。テレビ、映画、ラジオなどでスペインの風物を視覚的に、音楽的にあらわすとき、その精神的リズムないし色調は、galanteo のやるせない、なやましいリズム、色調と同一のものであるのが普通である。そして、フラメンコ舞踊の、黒い長鍔帽をかぶり、みじかいチョッキをきた男性舞踊手によってなされる或る仕草に、それは象徴されて

いるものである。こういう民族のにおいそのものと呼んでよい、ひじょうに民族的な仕草がいろいろな国にあるように、それぞれの国の舞踊や伝統演劇に凝結して形をとどめている。日本、中国、印度、ロシアなどにもそれはあるようだし、しかもそうした仕草はきまつて、やはりこれも民族的そのものの音律と曲まわしとにむすびついていることは面白い。

Valdés の小説のなかの男女接近法はすべて *galanteo* にぞくする、ということは Valdés 文学の見すごしがたい特徴としてよい。小説の男女関係にもいろいろなこしらえ法があるわけで、かならずしも恋愛以前からはじめねばならぬということもないわけだが、Valdés の小説は原則として、恋愛以前からはじまり、作中で男女が接近して恋をし、愛の終局へとすすむというのを立前とする。いわば正攻法でぶつかるのであり、恋愛の歴史の、発生から終結までの全コースがあつかわれる。そのなかには当然、もっとも大切な、コースの中心としての愛の告白と受容という、運命の裸体ともいえるやりとりがふくまれるが、これがきわめて入念に濃厚にあつかわれる。つまり典型的な *galanteo* である。わたしは前から Valdés のこれに興味と愛情をもってきたが、Valdés を *galanteo* 文学の代表とみることもできるし、スペイン的な *galanteo* が実在する証明資料とすることもできるし、またそれゆえに、もっともスペイン的な文学としてながめることもできる。Valdés の作品で男女の愛がおこると、きまつてまるで Valdés の世界にそうした電磁場があるかのように、そして鉄片がそれにひきつけられるように、*galanteo* がはじまる。これは Valdés がそれが好きという体質上の、つまりエロチックで、そのエロチシズムがそうした性格であるという体質上の問題でもあるが、そんなことで彼の文学はあたかも口説きことばの詞華集といった観をていする。

こうした求愛法にどうしてわたしが興味をもつかというと、ここに男女の愛の原型をみるからである。というのは一般論として男女の愛情交渉には、この軟派的、殉愛的姿勢が本質にあり、どんな場合でも、つまり社長でも警官でも

倫理の先生でも、愛をものにした以上、どこかの段階ではかならずこの照れくさい、甘ったるい姿勢をくぐっている。結局、これはドンファニズム論でもあるのだが、この殉愛的な姿勢のとくちょうは、非生産的であることである。時間とエネルギーの消費にすぎない。ドンファニズムが職業的な恋愛家、したがってほかにこれ以上の職業的なものをもたない、という意味をもっているのはこのためである。ただそれそのものが目的であって、意味づけをしてくれる価値体系がない。遊びとたわむれの真剣さ。この逆説を理解するものは、同時に、家庭をかまえることによって社会づくりに貢献するとか、子供をつくって種を維持するとかいった、愛の通俗的意義の笑止千万さをも理解するだろう。不真面目であるから真面目なので、後になってかえってこない浪費でしかないゆえに、死を賭けている。つまり人生を賭けている。亡びをいとわないがゆえに、あきらかに破滅的である。愛と死とがちかい、ということはこれからいえる。そして序にいうと、スペインを音と色であらわすものは、この二つがつながる微妙な地帯をたくみにしているのであって、それゆえにわたしたちにとって、魅力的であり、またそれは普遍的なのである。いってみれば、愛の逃避行にでかけ、つぎの朝をむかえた男女のようなもので、すべての社会のつながりをたちきった場所で、終日、愛だけを見つめてくらす、そして愛しかのこっていない、そういった世界である。そこにはオリンピックも、夢の超特急も、高速道路も、国家主義も、理想主義も、親子も、学校も、新聞も、登山ブームも、旅行ブームもない。健康的とよぶわけにはいかない。本来、愛とはそうした反社会的な、不良的な、やくざ的な、反モラルの世界だともう。女性がやくざや遊蕩児によわいということは、女性の本能がこの無目的なもののすごみの、かたぎが足もとにもよれぬ真剣さをよみとっているということかもしれない。

殉愛的な姿勢の第二のとくちょうは非知性的なことである。愛の伝達の方法は直接目的のいうとはかぎらないので、むしろ間接的なほど知的で洗練されているという錯覚、ないし習慣がある。たとえば日本の都会的な小説などで



も、主人公の愛の告白をいかに間接的にさりげないものにするかをきそっているような案配である。が、ここでは反対に、およそそのものずばりで言つてのけ、それ以外に交渉法のテーマはない。ただ愛のささやき、歎息、哀願、もたえ、強要しかない。そこで知識のレベルはひくいことになり、したがって Valdes の主人公は年令的にいって大体、少年くさいような若者である。そこには大人といったものなど許さぬ、いつも人間を幼い、他愛ない、無邪気なものに還元する Valdes の哲学もあるとおもえるが、そんなことから、ここではこの能率とスピードの時代とはかけはなれたムードで、のんびりと、けだるく恋がかたられる。“La alegría del capitán Ribot”（一八九九年作）などは例外で、中年の男になるが、しかしこの場合もそうだけれど、Valdes ではたとえ知的な人間でも、いったん恋をかたる段になると、およそ非インテリ的なあんちゃん風なものになる。すなわちそこでは非生産的な、非知性的な性格のもとに、職業、地位、名譽、財産、学識、年令、経験すべてを捨てさり、つまり一切の社会的、因習的裝飾をぬぐいさつた、裸の、つまりただの男と女という呼び名しかないような、つきつめた形で男と女があり、その愛がそういうものとして、愛のための愛として追求される。ドンファニズムということばが世界にひろくゆきわたったのも結局はこうした愛の真理にそれがふれていたからだとおもうが、こうした男女の愛情関係の純粹培養を、神話的巨대화をわたしは Valdes 文学のなかにみる。